

住みよい未来見据え議論

保健医療福祉未来図会議

陸前高田



陸前高田市の保健・医療・福祉関係者が一堂に会す市保健医療福祉未来図会議は17日、市役所で開かれた。限られた医療資源、高齢化が進む中で求められる地域包括ケアや地域医療をテーマに意見を

交換し、健康であり続けるための予防実験の意義や地域コミュニティの重要性を再確認した。

同未来図会議は、市民誰もが人の輪の中に入り、自然と語り合い、課題を共有し、互いに支え合

う「はまっぴん」を推進し、市が掲げる「ノーモラライゼーション」という言葉のいらないまちづくりの表現を目指している。本年度11回目、通算75回目となったこの日の会合には、関係者ら約80人が参加。

はじめに同市の岩屋神也地域包括ケアアドバイザーが未来図会議の理念などを説明。続いて、市民の健康づくりを推進する地域団体の代表や、市職員ら4人が「介護を避けた医療」「地域包括ケアの視点から生活を支える

医療」などにについて報告した。

このうち、市民生部保健課の伊藤隆哲主任保健師は「医療の今後とノーモラライゼーション」という言葉のいらないまちづくり」と題して発表。

伊藤主任保健師は、統合失調症は100人に1人、うつ病は10人に1人、1人が発症するといふデータと、精神科医が不足している気仙の現状を説明。そのうえで「陸前高田は、他人を排除しようとしてない地域性がある。障害のみに着目せずに受け入れ、一緒に『はまっぴん』を創っていくことが、医療資源が乏しくても住みよいまちに近づける」と語った。

その後、5、8人ごとのグループに分かれ、「医療に頼りすぎないまちづくりとして医療とどう歩むか」をテーマに協議。各グループからは、住民の共助につながる「はまっぴん」の取り組み普及、「予防は治療に勝る」として健康体操の推進など、さまざまな意見が上がった。

医療に頼りすぎず生きていく方について意見を交わした参加者たち。陸前高田市役所